

⑤米子市の取り組み

研究主題

「仲間とのかかわり合いの楽しさを感じ、主体的・協同的に学ぶ児童の育成」

～ 「資質・能力」の育成と「体育の見方・考え方」を働かせる学習過程の工夫を通して ～

1 研究の仮説

仮説1

「資質・能力」を育成するために運動の特性を踏まえた活動（簡易ゲーム、場の設定など）を行うことで、楽しみながら運動を行い、自ら課題を見つけ、主体的に課題解決に取り組もうとする児童を育むことができるであろう。

仮説2

「体育の見方・考え方」を働かせる学習過程を工夫し、授業改善に努めることにより、習得した知識や技能を活用して課題解決することや学習したことを相手に分かりやすく伝えることができ、さらに知識や技能を高めたり、新しい知識や技能を得ようとしたりする児童を育むことができるであろう。

2 研究の視点

（1）運動の本質を捉えた易しい単元教材による「資質・能力」の育成

運動の本質を捉えた易しい単元教材を創造し、それぞれの運動領域の運動の課題性に応じた「学び方」の視点や方法を焙り出し、児童が自ら課題解決に取り組むことで「資質・能力」を育む。

（2）「体育の見方・考え方（する・みる・支える・知る）」を働かせる学習過程の工夫

習得・活用・探求という学びの課程の中で、学びが深まる鍵である「体育の見方・考え方」を意図的に働かせるための工夫をし、さらに資質・能力が伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりする授業づくりを目指す。

3 今年度の主な活動内容

○米子市小教研専門部会 研修会

第1回 5月17日（金） 車尾小学校

第2回 8月20日（火） 車尾小学校

○授業研究会

全体授業研究会

西尾 友宏 先生（車尾小学校）

「打って走って 守って走って ティーボール」（6年：ボール運動）

領域別研究会

酒井 勇輔 先生

「みんなでステップアップ in 大篠津 park」（4年：体づくり運動）

○実践研究集録「飛翔」発行

○なかよし一輪車交流会 7月20日（土） 福生西小学校

○スキー教室のためのスキー研修 1月4日（土） だいせんホワイトリゾート⇒雪不足のため中止

○各種研究大会・研修会への参加

・県小体研夏季一泊研修会 8月8日（木）～9日（金）

・中・四国小学校体育研究会（徳島大会） 11月15日（金）

実践事例①

「打って走って 守って走って ティーボール」の実践を通して

米子市立車尾小学校 西尾 友宏

1 はじめに

ベースボール型ゲームは、攻守を規則的に交代し合い、攻撃または守備に専念しながら行うことができる運動である。一人一人に攻撃の機会が保障されており、運動経験や技能に関わらず、得点のチャンスが与えられていたり、走者が特定の塁上にたどり着くのと、守備側の共同作業とどちらが速いかを競ったりするところに楽しさがある。また、「打つ」動きや、「捕る」「投げる」といったボール操作、守備の隊形をとったり、走塁をしたりといったボールを持たないときの動きがあり、自己やチームの特徴に応じた作戦を考えたり、互いに伝え合ったりすることで、友達と関わり合いながら行うことのできる運動である。

2 取り組みの実際

(1) 単元計画

	1	2	3	4	5	6	7	8
ねらい 主な	学習の進め方を知ろう	得点をとるために、ねらったところにボールを打つ動きを身につけよう。		ボールをねらったところに投げたり、正面で捕球したりする動きを身につけて、早くアウトをとろう。		チームの特徴を考えて、チームに合った攻め方や守り方を考えよう。		練習の成果を試合で出そう。
学習活動	オリエンテーション ・準備・片付け ・安全面 ・キャッチボール ・ベースランニング ・ホームランゲーム	用具、場の準備						
		活動①スキルアップタイム ①ジグザグキャッチボール ②スローイングアウト						
		ミーティング・チーム練習タイム						
		・ティーより後ろに立って、バットを水平に動かして打つ。 ・体の向きを考えてねらったところに打つ。		・ボールの正面に入り、捕球したり止めたりする。 ・アウトを取るための守備位置を選択する。		自己やチームの特徴に応じた守備位置を考えたり、より確実にアウトをとるための動きを考えたりする。		
		活動②ゲームタイム ローテーションゲーム ゲーム						
		ふりかえり						

(2) ルール・場の設定の工夫

- 野球やソフトボールといった競技の経験や知識の有無に関係なく、全ての児童が関わり、参加することができるよう、ルールを簡易化したり、場の設定を工夫したりした。

【攻撃のルール】

- ◆ バットをバットゾーンに入れると1点。
 - ◆ 守備側がアウトをとるまでにたどり着いた塁が得点になる。
- (1 塁：1点、2 塁：2点、
3 塁：3点、本塁：4点)
- ◆ 3mラインを越えない打球はファールとする。

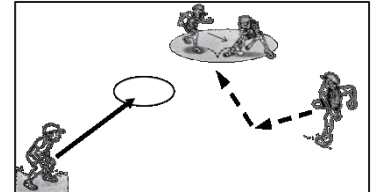
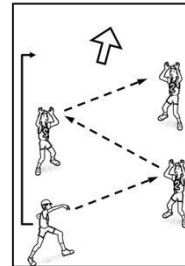
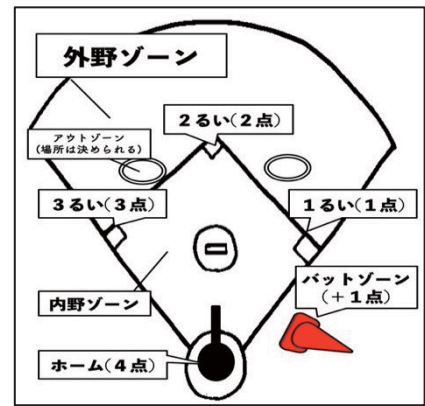
【守備のルール】

- ◆ 打球を捕球したら必ず投げて、仲間にボールを渡さなければいけない。
- ◆ ボールを持った人ともう1人がアウトゾーンの中に入ったら（アウトゾーンの中の人にボールを渡したら）、「アウト」と言う。そこまでの点がバッターの得点となる。
- ◆ アウトゾーンは2カ所で、守備側が場所を決めることができる。（回の途中では変えられない）
- ◆ 外野に上がった打球はノーバウンドでキャッチするか、手に当てればアウトにできる。

- ・ アウトゾーンの位置をチームで任意に決められることで、チームの特徴に応じた作戦が立てられるようにした。
- ・ 高く上がった打球に対して、①落下点に入る、②打球を捕球する という2つの技能が必要になるが、児童の段階を考慮して①を優先するために、外野ゾーンに飛んだ打球には、手に当てることができればアウトにできるとした。

(3) スキルアップタイムの設定

- ・ 毎時間の始めに「スキルアップタイム」を設定し、守備に関する技能の習熟を図るようにした。「ジグザグキャッチボール」では、「捕る」動きと、投げたい方向に「狙って投げる」動きの習熟を、「スローイングアウト」では、捕球からアウトゾーンでアウトを取るまでの動きの習熟を図るよう、チームで協力しながら練習することとした。また、守備で大切なのは、多くの点を取られる前にアウトをとることであることから、スキルアップタイムに取り組む運動はどちらも、「一定時間内にチームで何度できたか」をポイントにすることで、単元を通しての技術の向上が見えるようにした。

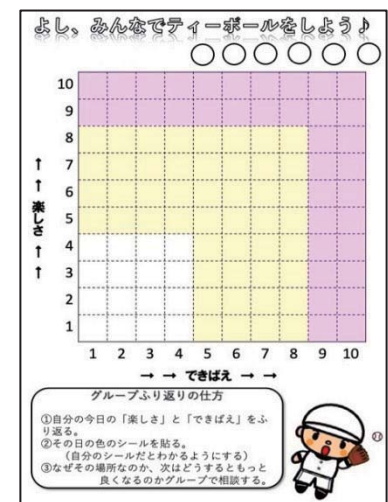


↑スローイングアウト

←ジグザグキャッチボール

(4) 言語活動の充実

- ・ 作戦ボードを用いて守備位置や送球の確認をさせることで、経験値の少ない児童も視覚的にイメージしやすくした。
- ・ 「ふりかえり板」を活用して、学習の「楽しさ」「できばえ」について振り返る時間を設けた。グループや全体で課題を共有することで、話し合いや教え合い、めあての設定のきっかけとするとともに、自己評価が低い児童へ言葉かけをした。



3 成果 (○) と課題 (●)

- アウトゾーンを2つにし、2人以上入らないとアウトにならないとしたことで、ボールを持っていないときの動きを考えたり、全ての児童が打球に反応して動いたりすることができ、全員がアウトへの貢献を感じたり、積極的に動いたりすることができた。
- スキルアップタイムを毎時間設定することで、全ての児童がボールに触れ、「投げる」「捕る」動きをくり返し行うことができた。児童一人一人のそれらの技能の向上を見たり、児童が実感したりすることはゲームの中ではなかなかでないが、スキルアップタイムを単元を通して設定したことで、「落とさずにキャッチできるようになってきた」「ボールを捕った後すぐに投げられるようになってきた」という実感を児童が抱くことができていた。
- ベースボール型は他のボール運動に比べ、投動作に焦点を当てることができるという特徴があり、そのためにも守備に重きを置いた単元の構成を考えた。しかし、授業の中でのめあてやチームのめあてが守備についてのものになっていても、児童一人一人のめあてが攻撃面に傾き、自ずとふり返りも攻撃に関することが多くなった。チームで守備について話し合ったり、作戦を立てたりして、守備の動きも時間を追うごとに高まってはいたが、めあてに対するふり返りとの一貫性、児童へのフィードバックが薄くなってしまった。児童の実態や運動の特性を考慮した単元構成が必要だと痛感した。
- 児童はアウトをとりやすい位置にアウトゾーンを置いていくため、打球がアウトゾーンの近くに飛ぶことが多かった。「思いっきり投げる」ということが少なく、投力の必要性を感じるという点では簡易にし過ぎたのではと感じた。アウトゾーンをベースに固定したり、内野に限定したりするなど、柔軟に変えていくことが大切だと感じた。

実践事例②【「わたしたちの体育」を活用した実践】

第3学年「かけっこ・リレー」

～「わたしたちの体育」米子市担当ページの検証

米子市立河崎小学校 鉄尾 知史

「わたしたちの体育」に示された各活動についての特徴と評価

1 活動①より (P5, 6)

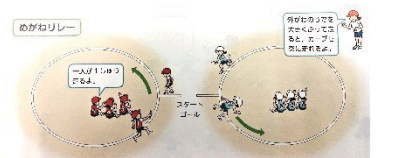
活動名	特徴	評価
40m追いかけ走 	走力に応じてスタート位置を変えることで、誰とでも競争を楽しむことができる。	活動のねらい通り、誰とでも競争を楽しむことができた。普段かけっこで勝てない児童も喜びを感じることができる。ペアでスタート位置を調整するための相談など、自主的に行っていた。
追いかけ走 (バトンを使って) 	タッチでバトンを使うことで、よりバトンを受け渡す感覚に近付ける。また、全力で逃げることもねらいとする。	「渡す人が近付いたら、タイミングよく走り出す」ことを練習できた。どの程度近付いたら走り出すかの基準については一定の距離で授業者が示した。 右手渡し左手受けの理由（前走者が見やすい、走り終わった後内側へ安全に抜けることができる、など）を児童と確認するための大事な活動になった。
コーナー走 	スピードを落とさずにコーナーを走るための活動。スタート位置も走力に応じて変更できる。	実際のリレーの活動では、コーナーを走ることが多いので、コーナーの走り方を学習するために必要な活動ではあるが、曲がりも緩やかなため、走り方について意識付けが難しかった。この点はめがねリレーの方が有効だった。

活動①について

さまざまな活動でかけっこに親しみ、多様な身体活動を経験することができる。授業では、「わたしたちの体育」で紹介された運動に加えて、コーンバーを走りながら跳び越える動きなど、ハードル走につながる動きを取り入れたり、挑戦したいコースを自由に選択する時間を設定したりした。休憩時間に友達と相談しながら自分たちでコースを作って楽しむ児童の姿も見られた。児童がいつでも活動できるように、グラウンドにレーンを常備したり、ミニハードル、コーンなどが自由に使用できるよう準備したりすることも有効であると感じたが、学校環境として難しいことも多い。学習中に運動量と質を保障することが、より求められると感じる。



2 活動②より (P 7, 8)

活動名	評価
めがねリレー 	安全に活動を行うことができた。周回の距離も指導例より短く設定したので、何周も回って楽しんでいた。コーナーを走る際に「体を傾ける」ことを意識しやすく、多くの児童が意識的に取り組んでいた。 バトンパスの練習も取り組みやすく、繰り返し活動を行っていた。「走りながら」という点も意識しやすい。
特徴 2つのサークルコースを別々に走ることで、接触がなく安全であり、またコーナーの走り方も学習することができる。	指導例には競争の方法も示されているが、授業では競争は行わず、練習の場とした。1周の距離を正確に取ることが難しかったことと、練習の場として児童が楽しんでいたことが主な理由である。
活動名	評価
追いかけリレー② 	めがねリレーと同様、安全面が配慮されていて、スムーズにバトンパスの練習を行うことができた。安全に競争ができるため、バトンパスなど練習したことを発揮する場として有効だった。 「わたしたちの体育」を用いて運動のルールや行い方を確認したことにより、スムーズに活動することができた。 チームのメンバーに応じて、走順を変えたり、受渡しの位置を変えたりすることができた。チームの中でバトンパスが上手くできるペアを探すためには、そのための練習時間が必要だが、確保できなかった。友達と話し合う場面は見られたが、走順についての話が主だった。
特徴 めがねリレーと同様、安全面が配慮されていて、スムーズにバトンパスの練習を行うことができる。 チームのメンバーに応じて、走順を変えたり、受渡しの位置を変えたりすることができる。	勝敗については、授業者が一人であるため、難しさを感じた。ストップウォッチを持たせ、チーム内でタイムの向上を図る活動も有効だと考える。よりスムーズなバトンパスがタイムにつながることで、より主体的な活動が見込めるのではないだろうか。
活動②について	
全ての活動について安全面が十分に配慮されており、バトンパスの練習に集中して取り組むことができた。初めて行う形のリレーについても、事前に「わたしたちの体育」に目を通しておくことで、ルールの把握も容易にできた。競争できるように活動が設定してあるが、ゴール場所が異なることもあり、勝敗の受け入れも自然にできていた。勝敗よりも、バトンが上手く渡ったことに喜ぶ姿も見られた。 めがねリレー、追いかけリレー②の他、スウェーデンリレーも行った。スウェーデンリレーは、基本的にバトンの受渡し場所が共通なので、スムーズなバトンパスに必要なことを考えたり、話合ったり、練習したりすることができる。単元の最後の活動として適していると感じる。 活動①から②へと段階的に活動を行うことで、自然とリレーに親しみ、楽しむことができた。	

実践事例③【「わたしたちの体育」を活用した実践】

みんなでステップアップ in 大篠津 park

米子市立大篠津小学校 酒井 勇輔

1. はじめに

多様な動きをつくる運動では、他の領域において扱われにくい体の様々な動きを取り上げ、その行い方を知るとともに、運動の楽しさを味わいながら体の基本的な動きを培うことのできる運動である。また、中学年の体づくり運動は、低学年で学習した様々な基本的な体の動きに加えて、工夫することで、更に多様な動きを身に付けたり、児童が新たな動きを生み出したりする可能性がある運動である。

本学級の児童は、体を動かすことが好きな児童が多い。休憩時間には、ドッジボールやサッカーなどをして遊ぶ姿が多く見られる。一方で、「運動は苦手」という児童もいる。主な理由として、「やったことがない」や「恐怖心がある」などが挙げられた。学級全体として、運動の経験に大きな差があり、二極化があると推測される。

今回の実践では、「わたしたちの体育」の挿絵や動きの工夫を活用し、友だちと互いに見合ったり補助し合ったり、競争したりしながら学習することで、効果的に動きの質を高めることができると考え実践していった。

2. 指導の実際

(1) 単元の計画

（１）準備活動						
	1	2	3	4	5	6
主 な 学 習 活 動	・目標設定 ・オリエンテーション	活動①いろいろな運動を行いながら、自分の体力に気付き、運動の質を高めよう。			活動②より運動の質を高めるために、動きを工夫したり、組み合わせたりしよう。	
		分かる・できる 体のバランスをとる運動 体を移動する運動 用具を操作する運動 力だめしの運動			いかに・挑戦する 基本的な動きを組み合わせる運動	
大篠津 PARK で遊ぶ						

(2) 指導の工夫

○ふり返りの充実

わたしたちの体育の学習のあしあとを活用し、目標を持って意欲的に取り組もうとする意識を高めたり、運動の質の向上に気付いたりできるようにする。グループに1つ「ふり返り板」を用意し、学習終わりに「楽しさ」「動きのできばえ」を自分で確認し、それを用いて、グループ内で活動について話し合うための手立てとし、振り返りの充実を図った。

○「する・見る・支える・知る」の視点での授業づくり

4つの視点を指導案の中に位置づけ、指導者が意識しながら取り組んだ。

- ・自分の動きの質を高めながら、よりよい動きになるように追求する姿を目指す。
- ・互いの頑張りを、学級全体で賞賛したり、共有したりする。
- ・友だちの手伝いやアドバイスをしていく姿を目指す。
- ・運動を行うことを通して自己の心と体の状態に気付く。



「目指す未来像」

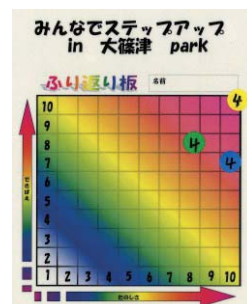
スポーツに関心を持ち、体を動かすこと自体を楽しみ、スポーツや運動に関わりを持つようとする。

3. 成果 (○) と課題 (●)

○「ふり返り板」を使って友だちと共にふり返ることにより、友だちの困り感を共有することができた。友だちに対して、考えを伝えたり、アドバイスをしたりする姿が見られた。

○活動①で一つ一つの動きの質を高め、活動②で工夫したり、組み合わせたりしようというねらいが明確だったため、活発な活動につながった。

●基本的な動きを組み合わせる運動をする際、活動①で学習した動きとは違う動きを組み合わせているグループがあり、ねらいとずれていた。活動を見ながら、的確に声かけをする必要があった。



ふり返り板 (グループ)